

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	謝 林
学位論文題目	中世小歌の研究 ―漢詩・漢語との関連性の視点から―
<p>本論文は、『閑吟集』と『宗安小歌集』の小歌を中心に中世小歌と漢詩・漢語との関連性を明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>『閑吟集』と『宗安小歌集』は中世を代表する歌謡集である。『閑吟集』は永正一五年(1518)に成立した編者不明の小歌集であり、純粋な小歌と、当時の流行歌謡の一節を小歌に組み入れ編纂したものである。収載された歌数は三一一首あり、中国最古の詩集である『詩経』の歌数と一致する。一方、中世末期に成立した『宗安小歌集』は、二二〇首の歌を有し、『閑吟集』と類似する作品で一定の継承関係が認められている。この二つの小歌集は序文において、大陸の音楽思想に言及していることや漢詩の摂取を示唆していることに加え、所収歌謡の一部にも漢詩からの直接及び間接的影響が認められる点で共通している。</p> <p>これらの小歌集に関する従来の研究においては、漢詩の小歌化という現象を重視し、句の単位において漢詩との関係を考察する傾向が見られる。しかし、和漢の歌謡を問わず、一首の歌の中には往々にして人の注目を誘う詩語が置かれており、成句の単位で影響を受けた小歌もあれば、一つの詩語に発想を得た小歌も少なからず存在している点は、これまであまり考慮されていなかった。</p> <p>本論文は、漢詩からの影響を句の単位から広げて、文学的色彩や象徴性を持つ漢語を利用することによって、和漢の折衷で創作された小歌が存在する点を考察するものである。句の単位から語の単位へと視点を移すことにより、小歌と漢詩・漢語との相互関係がいつそう明からになると考える。</p> <p>本論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>序章は、これまでの小歌に関する先行研究を整理しながら、本論文の視点について述べたものである。諸先学の研究成果をまとめ、小歌の由来、発展、代表歌集などについて概観する。そして、特に漢詩との関係に論及した部分に重点をおき、漢詩との関連性に関する研究の成果及び残された問題を明らかにしながら、本研究の位置づけとその意義を論述する。</p> <p>第一章は、「上林」を詠み込んだ『閑吟集』二六番歌を論じたものである。「上林」とい</p>	

う語は、二つの読み仮名「うへのはやし」と「しやうりん」が付記されている特別な語彙である。一首の歌は、「上林」「鳥」「鳴子」などの要素から構成される。中国の漢詩における「上林」は、皇帝の庭園である「上林苑」を指すことが多く、漢詩の世界においては「上林」「鳥」などの詩語の組み合わせが定式化している。中世の文献資料を調べると、禅林文学にも「上林」を詠む作品が一定数存在し、その受容が見られる。「上林」や「花」をはじめ、「鳴子」を「護花鈴」として扱う際に、二六番歌は、和漢の素材で巧みに生かすことを意図して作られた歌であったと考えられる。また、狂言において二六番歌を「うへのはやし」の意味として取り入れていることを、その経緯を含めて考察した。

第二章は、「せいしやう」を詠み込んだ『閑吟集』二八一番歌について論じたものである。「せいしやう」については、これまで様々に解釈されてきたが、合歡の異称としての「青裳」として理解されるのが大勢であった。しかし、中国の文献資料を調べると、「青裳」を「青堂」「青棠」「青囊」などの語で表記されることも多く、当該の知識が伝承する過程の中、異同が生じることを明確にした。当時、「青裳」という珍しい知識を小歌に取り入れることは、貴族や僧侶をはじめ、高度的な教養を有する上層に属する人物の所為であった。また、合歡の漢詩的イメージを考察し、合歡は恋人を待ち続ける深閨の女性というイメージを有することを明らかにした。二八一番歌は合歡の漢詩的イメージを利用し、「つばい」という語と巧みに結び付け、歌の作り手の大胆な発想力を見せている歌であることを論じた。

第三章は、「白菊」を詠み込んだ『閑吟集』の小歌を論じたものである。『閑吟集』には「白菊」を詠み込んだ歌が二首（二〇四番と二〇五番歌）ある。二〇四番歌に関して、従来の研究において、和歌から影響を受けたものとの理解が多かった。しかし、これは単純に男女の関係を表すものではなく、男色関係を暗示する歌である可能性もあると指摘した。一方、二〇五番歌は非常に短小なものであり、今まで二〇四番歌の延長と解釈されるのが一般的であった。しかし、小歌以外にも白菊を主題にした文芸作品が数多く存在し、和歌や謡曲、漢詩などの作品を調査することによって、白菊は美しい少年と白髪の老人という両面の象徴性をもつことを明らかにした。さらに、漢詩中の菊は陶淵明と密接な関係を有するため、二〇五番歌中の「霜の白菊」は隠逸の老人を象徴していると考えられる。『閑吟集』には人生に対する感慨を詠ずる歌が一定の数量として存在し、二〇五番歌もその中の一つとして理解することができるということを論じた。

第四章は、「しんこ」という言葉が使用された『宗安小歌集』三八番歌を論じたものである。三八番歌に使用されている語彙「しんこ」は、従来「尽期」と解釈されてきたが、その妥当性と根拠を再検討し、「尽期」を退けて新しく「真箇」という解釈を提示した。

同歌にある「月をふんては」と「風雨の来」の二表現を考察する上において、三八番歌が漢詩との強い関連性を有する点を重視して再解釈を試みた。「しんこ」は「尽期」ではなく「真箇」と解すべきであり、漢語的表現が使用される同集の収載歌は日本の伝統的な恋愛観を踏まえつつ、漢語表現の導入により新味を演出したものである。『宗安小歌集』の三八番歌は、漢詩を好む人物が作り上げてから民間に流入した和漢折衷の小歌であることを詳論した。

第五章は、『宗安小歌集』の小歌を阮籍の詠懐詩と比較し、『宗安小歌集』の歌の中には、阮籍の漢詩に由来したものが存在することを明らかにし、阮籍の漢詩と小歌の共通性を論じたものである。竹林の七賢人の一人、或いは酒豪として世に知られている中国の詩人・阮籍は、詠懐詩（五言）という八二首からなる長編をもち、『文選』にも一七首ほど収録されている。『宗安小歌集』の序文では阮籍の名が白居易と並べられており、阮籍の作品から影響を受けていることが窺える。『宗安小歌集』一八二番歌をはじめ、阮籍の漢詩と共通する部分を見出し、その影響の実態を検証した。また、阮籍の『楽論』を考察し、阮籍の音楽思想と小歌の性質との接点を考察した。それにより、「物」に対する描写や「移風易俗」という音楽思想という点において両者が共通していることを明らかにした。阮籍を序文に取り入れた理由は、嘯いたり酒を飲んだりすることが理由ではなく、彼の作品や音楽思想と繋がっているということを論じた。

終章は、各章の考察をまとめ、結論を導き出したものである。本論文は五章にわたって個別に小歌を分析してきた。本論文が追究する小歌が漢詩・漢語と如何に関わっていたのか、漢詩が如何に小歌化されたのかという問題について、次のような結論を得た。第一に、小歌は句（漢詩句）の単位で漢詩を摂取しただけではなく、語（漢語）の単位において漢詩の一場面を彷彿させることもあった。第二に、小歌は「物」のイメージを上手く利用している。この「物」に凝縮されたイメージは漢詩の詩語から流用されることが多い。第三に、小歌は、和と漢の要素を上手く融合させたものである。その中には、類例のない大胆な発想もあり、小歌ならではの新しさを見せている。

和歌や漢詩のような雅の文芸は、もともと貴族や僧侶など社会の上層に属する人の専有物であり、社会の下層に暮らす人々と無縁なものであった。中世は戦乱の続く社会変動期であり、人々は心の慰めを求めている。小歌は、人の心を慰める役割を果たしたものである。社会秩序の崩れにより、かつて上層階級に壟断された文学や知識は、次第に民間に流入していった。この過程において、小歌は漢詩の優れた部分を積極的に吸収しながら俗なるものを配合し、高雅と卑俗を共演させた新しい文学の様式を世に送り出したのである。